

立入禁止区域の月

丸尾 聡

登場人物

一 森の中の探しもの

少女

戻って来た男

二 金の箱が残った

失った男

女

配達員

白衣の男

二人の男

三 西へは

荒くれ男

マスター

少女

若い男

酒場の女 1

2

3

四 センターで

検査官

若い男

五 失われたものと

荒くれ男

戻って来た男

少女

あの子

六 月を照らす

待っている男 1

待っている男 2

七 月の向うに出かけよう

少女

若い男

失った男

登場人物はいくつかの役を同じ俳優が兼ねることが可能で、むしろそうした方がよく、なるべくト書きに書き込んだ。
七つの景からなる作品だが、いくつかの景は独立した短編として上演することも可能と思われる。

人の出入りを阻んだ立入禁止区域。当初生命は滅びたかに思えたが、やがて森となり動物たちがやってきた。多少の奇形はあるが、淘汰されていき、一見命溢れる豊かな森となっている。この森が舞台のベースとなる。

そして、どうやら日本であるらしい、どこかの場所。

忌まわしい事故から数十年後、あるいは数百年後。

ではあるが、空間はエモーショナルなもの、感情的なものであったほうが、ずっといいと思う。照明や演劇的な仕掛けの手助けを借りたい。

一 森の中の探しもの

鳥、動物の声が聞こえる森。

少女が『立入禁止区域』にいる。手に持った人形に語りかける。

少女 とても考えたの。信じられないくらいたくさん。それで、やはりあなたはあの子と一緒にいるべきだと思ったの。誤解しないで。あの子がひとりぼっちで可哀想だからとかそういうことじゃないの。だってそれなら、あるとき・・・、ほら、ここではなんでもかんでも一緒に埋めるって決まってるでしょ。あるとき、こっそりあなたを隠しておかなくなったって良かったんだから。わかる？ 私が何もしなかったら、あなたは今、あの子と一緒にだったってこと。一緒にあるべきものがそこにないって、とても哀しいことだってわかったの。それが自分のせいだってときには特に。それで、私・・・

男が立入禁止区域にやってきた。

戻って来た男 (少女の存在に驚いて) 何してるんだ？

少女 だれ？

戻って来た男 君こそ誰だ。

少女 えええ？！

戻って来た男 (少女の驚きように) え。

少女 君って、私のこと？

戻って来た男 そうだけど。君は・・・

少女 君って呼ばれたの初めてなの。驚いた。そんなふうに言われるなんて。 な

戻って来た男 名前は？

少女 名前？

戻って来た男 名前があるだろう、誰にだって。

少女 そうね、そうかもしれない。でも、すぐに忘れてしまうのよ。薬を

飲み忘れるせいかしら。どうなのかしら。私には最初から名前があったのかしら。あなたは？ あなたの名前は。

戻って来た男 僕の名前は……（思い出せない）

少女 あなたもなのね。名前がないんだわ。

戻って来た男 そんな……。

少女 どうしてここに。私はこの子（人形）を返しに来たの。あの子に。

あなたはどうしたの？

戻って来た男 え。俺は……

少女 私がそういうのは、あなたが見たことがない人だからよ。見たことのない人にはあまり会わないもの。この森では。

戻って来た男 来たばかりなんだ、ここに。

少女 （人形を隠しながら）あなた、新しいセンターの人なの？

戻って来た男 いや、そうじゃない……。君は、ここに住んでいる人なんだね。

少女 ええ。

戻って来た男 ほんとうにいるんだ。話は聞いたことがあったけど。

少女 ずっとここにいるのよ。

戻って来た男 ずっと？ ……でも、こんな所に来ちゃ駄目じゃないか。

少女 どうして？

戻って来た男 だって、……ここは特に危ないんじゃないか。

少女 それ、立入禁止区域の中の立入禁止区域って意味ね。

戻って来た男 うん……。

少女 とても面白いわ。それで、あなたはどうしてここにいるの。

戻って来た男 俺は……戻って来たんだ。友達から便りがあったね。

少女 友達がいるなんて羨ましい。

戻って来た男 何年も会ってないんだ。ここを出てからずっと……いつか

らなんだい、ここがこんな森みたいになったのは……

少女 わからないわ。前からだもの。

戻って来た男 ……ここに人が住んでいた。ああ、もっとたくさんってこと

なんだけど。

少女 母さんから聞いたことがあるわ。

戻って来た男 僕の母さんもここに住んでいてね、母さんだけじゃなくて、父

さんも、それから妹とおばあさんもいた。

少女 あなたも。

戻って来た男 ああ。それからここを出た。みんなで。いや、口うるさかったお婆さんは残った……その家があるはずなんだ。

少女 埋められていないの？ 昔の「穴」ならもう蓋をされているはずだもの。

戻って来た男 初めてじゃないんだよ。ここに来るの。そのとき見つけたよ。

少女 住んでいた家？ すごいわ。

戻って来た男 友達がいるっていったら。様子を知らせてくれた。

少女 どうだった？

男に明かりが当たる。

戻って来た男 もうぼろぼろだった。古い木造の家だったからね。でも、残ってた。

少女 私も時々発見するわ。昔の、皆が置いていったものなんですってね。戻って来た男 ほんとうにいろいろだった。写真が残っているのは驚いた。もう焼けていたけれど。状態がよかったんだな。それから、テレビとか……。茶碗や箸とか、くだらないもの。そう、くだらない、そういうものがたくさん。鳥かごもあった。

少女 へえ。

戻って来た男 でも……

少女 どうしたの。

戻って来た男 すぐにそこを離れたよ。

少女 どうして。

戻って来た男 どうして……。禁止されているし、それから……。いや、見ていられなかった。だから帰った。今、住んでいる町へ。

少女 でも、戻って来たのね。

戻って来た男 ……。

少女 あなた苦しいの？

明かり戻る。

戻って来た男 苦しい？

少女 わかる？ 苦しいって。

戻って来た男 ああ、わかる……。そうかもしれない。いや、苦しかったんだ、ほんとのことを言うと。

少女 私も、だからあの子にお人形を返しにいくのよ。

戻ってきた男 なにか大切なものなのかい？

少女 ええ、きつと。だから返しにいくの。

戻って来た男 どこへ。

少女 一番新しい「穴」よ。だってあの子はそこに埋められたから。母さんの言い方だと、放り込まれるだけ。いつもそうだった。

戻って来た男 俺も行くか。

少女 だって、あなたもいくところがあるのに。

戻って来た男 いいんだ。見つからないし。

少女 お家ね。

戻って来た男 ああ。思っていた場所が違うみたいだ。だから、いろいろなところを探そうと思ってる。

少女 それなら「穴」の後に、本当は一緒に行ってほしいところがあるの。違うわ。行って欲しいんじゃないなくて探してほしいの、一緒に。だってとても大変なんだもの。うまい事探し当てられるかもわからないの。

戻って来た男 探す……

少女 月を、探して。

戻って来た男 月？ 月って・・・あの月かい？

少女 母さんが言ってたわ。最初の頃、それはよく月が見えたって。なにもかもなくなってる、それから・・・

戻って来た男 森が広がった・・・

少女 私、月を見たことがなかったの。

戻って来た男 月は、どこからでも見える。

少女 そうなの。そういつてたわ。母さんも死んでしまうその前に。「ああ。月だけは」って。ちょうどぽっかり浮かんだの。木の枝と枝、葉っぱと葉っぱの間の真ん中に、ちょうど満月があって、月とその光が周りに少し漏れているその分だけ、隙間が空いていて、こっちを見てるの。私、母さんが寝ている横に一緒になって、その月を見たわ。

「月だけは」って、そのとき母さんが言ったのよ。

戻って来た男 それで。

少女 わかるでしょ。木がどんどん繁るから、いつもいつもその場所はどこかへ行ってしまうの。だから、ちょうどいい場所を探すのよ。この森で。

戻って来た男 そんな場所があるのかい。

少女 あるのよ、きっと。暗くならなければわからないけれど。

明かりがゆっくりと変わっていく。

二
金の箱が残った

女が眠っている。失われた女。テーブルの上に蝋燭と金色の箱。戸を叩く音。

誰なの？ あなた？

男が入ってくる。失った男。外は雨が降っているようだ。

私だよ。

男 女
ああ、よかった。眠っていて、何か夢を見ていたみたい。どうでしたか。

よくない。

男 女
ああ、あなた雨に濡れているわ。すぐに拭かなくちゃ。同じことだ。

でも、よくないわ。

女、男の雨を拭う。

男
おまえこそ、具合はどうだ。

少し喉の調子が。それで、どうでした。

よくない。

じゃあ、「光り」はまだ？

男 女
ああ。だが、村の連中と山に登ったら、「向うの街」には明かりが見えた。「光り」が来ているらしい。だが、ここには。

じゃあ、まだあなたのお店を開くことは出来ないのね。

男 女
「光り」だけじゃない。いろいろなものが足りない。前はなんだったであつたのに。今じゃ、なにもない。

このあたりはどうなってしまったの。

月の明かりだけが頼りだ。さあ、食事に行こう。

女 男 女
ああ、ごめんなさい。裏の畑へ行くのをすっかり忘れていたわ。眠ってしまつて……。 (行こうとする)

やめろ。

なぜ。身体の調子なら大丈夫よ。

女 男 女
やめたほうがいい。雨が降っているから。

・・・

なにか家はないのか。

女 男 女
ごめんなさい。なにもないの。畑からと思っていたから。

女 男 女
そうだな。節約しよう。

夕飯を？

ああ。

男 女 男
・・・そういえば、昨日もそうじゃなかったかしら。

探せばなにか出てくるかもしれない。(男、探しに行こうとする)

女 (眠りに落ちたかのように)・・・このままなのかしら。

ドアが激しく叩かれる。

男 箱を隠せ。

配達員が現れる。

配達員 「お知らせ」を届けに参りました。

男 おまえは・・・、この村の人間ではないか。

配達員 そうです。ですがもう村はなくなりますので、そうとも言えません。どういふことだ。

配達員 「お知らせ」を届けに参りました。

配達員、男に「お知らせ」を渡す。

女 駄目！ 駄目です。この人から取り上げないで。夕飯も節約します。

他にないんです。畑やお店を取り上げないで、お願いです。

男 こいつは病気なんだ。

女 あら、あなた濡れているわ。すぐに拭かなくちゃ。

配達員 その必要はありません。

女 なぜ。

配達員 そういわれているからです。

女 だれに？

男 (「お知らせ」を読み終わり) なんとということだ。(女に) おまえが、今、言った通りだ。

配達員 期限がありますので、ご注意ください。

男 期限を超えるとどうなる。

配達員 罰金です。

男 罰金?! 自分の家に、愛する女といるだけで罰を受けるのか。

配達員 お察し致します。では、お届け致しました。

男 不思議だ。おまえの名前が思い出せない。同じ村の人間なのに。

配達員 そういう役目になりました。

獣の声が聞こえる。

配達員 獣たちです。人がいなくなる気配を感じたのでしょうか。人がいなくなれば、ああした連中は喜びます。

女 あなたはどうするの。

配達員 もちろん、この村を出て行きます。

女 それで。

配達員 それで・・・。

男 無効だ。この「お知らせ」には差し出したものの名前がない。(女に) ほら、見て御覧。何も書かれていないだろう。

女 本当だわ。

配達員 だとすれば、名前のないものからの「お知らせ」でしょう。
男 抗議する。
配達員 だれに？

配達員去る。

男 だれかが、消してしまった。だれかが禁じてしまった。名前のない連中が。
女 あなた、私はあなたを愛しているわ。あなたが全てを奪われて、それから私が病気でも、またどうにかなるわ、きつと。
男 わかっているだろう。おまえ。私が嘆いているのは違うことなのだ。今の男を知っているだろう。
女 ええ、とてもよく。名前を思い出せないのが不思議なくらい。
男 あいつもあいつの父親もそれから年の離れた妹も、私の店に来ていた。あいつは、まず母親に抱かれてやって来た。そのうち、家の金をくすねて一人で来るようになった。それから恋人を連れて来た。そしてその子と結婚し、その次には子どもを連れて来た。
女 ええ、そうだったわ。
男 だが、もう、あいつは来ない。だから、もうやれない。
女 やれるわ、きつと。
男 出来ない。
女 出来るわよ。そうやって暮らして来たのだから。
男 そうだ。それは事実だ。だが、あいつも、他の誰も、もう来ない。
女 きつと誰か来るわ。きつと。
男 ……
女 まだこれがあるもの。(金色の箱)

二人、金の箱を見つめた。

男 もう新しい誰かを待つのは、そろそろ疲れる年だ。・・・そうだ。納戸に去年塩漬けにしたキノコが残っていた。それから大豆も。食事にしよう。
女 そうしましょう。

ドアを激しく叩く音がする。白衣の男が立っている。トランクを持っている。

白衣の男 シールを下さい。
男 なんのことだ。それにおまえさんはいったい・・・
白衣の男 白衣の男です。非常に重要な仕事をしています。
女 あら、あなたは。
男 知っているのか。
女 ええ、あなたが留守のときに。
白衣の男 奥様。お預けしたシールを頂きに参りました。

女の胸にシールがついていた。白衣の男、それを回収する。男に、

白衣の男 シールを頂きます。

男 そんなものは……

白衣の男、男の服の隠れた所から、シールをはぎ取る。

白衣の男 ありがとうございます。

女 私がシャツにつけたの。とても重要なものだと言ったから。ごめん
なさい。お話ししたつもりだったのに。

男 仕方がないさ。

白衣の男 病院はどこも一杯ですからね。

男 さあ、帰ってくれ。

白衣の男 あの箱ですか。

男 なんだって。

女 駄目、それこそ駄目よ。

男 おまえはシールが欲しいだけじゃないのか。

白衣の男 調べなくてはなりません。重要な仕事です。

男 噂では、男が家を廻って持ち去っていくと聞いた。

白衣の男 たくさんの係がやって来ていますので。

女 とても大切なものの。それをなくしたら、

白衣の男 ちょうどここに来る前に、通報がありましたから。

女 あの男の人が、まさか。

男 前からだ。あのことが起きる前からのものだ。

白衣の男 そうでしょうね。影響を調べたいのです。

女 大事なものの。

白衣の男 大事なもの……。これは、それに代わるものです。つまり大
事なものです。(トランクを開けてみせる)

白衣の男 ほら。

トランクの中身が鈍く光る。

男 おお。

女 あなた。

男 輝いている。美しい。

白衣の男 では、そういうことで。

男 だが、まやかした。

トランクの中の光消える。

白衣の男 そうですか。また別の係のものが来るでしょう。

白衣の男、トランクを持って去る。二人はしばらく呆然としている。

女 あなた……。とても辛いよね。

男 ああ、辛い。とても。

女 あなたは不器用だわ。
男 わかっている。

女 そしてとても正直だわ。だからとても辛いよね。そう。正直に生きるってとても辛いことかもしれないわ。こんなふうになると余計に。さっき訪ねて来た男の気持ちが変わるような気がする。

男 そうね。(女は次第に眠るように)あの人もきつと苦しんだり辛かったりしたのでしょね。一緒ね。でも、あの人はきつとそれを、苦しみや哀しみをないことにしたかったんじゃないかしら。でも、あなたは、きつとそうはできないし、しようともしない。だから、そうね、誰でも辛いんだから、それを正直に認めて、あなた立派だわ。それから……。ろうそくが消えそうだわ。これが最後の一本なの。どこかから手に入れてくるさ。おまえといると気が休まる。そうだ、そうすればいい。何を迷う必要があつたんだ。またどこかで、あんな店と一緒に。覚えているかい、初めてあの店を開いた時のことを。

女、目を閉じていて答えない。ノックの音がある。白衣の男が現れる。

男 出て行け。

白衣の男 シールでわかりました。すぐに調べたのです。

二人の男が入ってくる。手際よく、女を担架に乗せる。

男 どうするのだ。

白衣の男 とりあえずの規則では、埋葬することになっています。私は調べたいのですが。

女、運び出される。

男 私も行こう。

白衣の男 焼却場は壊れていますし、復旧の見込みがありません。また、この村のお墓は、立入禁止区域となりますから特別な許可がなければ近づけません。というより、この村全体が立入禁止区域となりました。言うまでもなく危険だからです。

男 期限は、期限はまだだろう。

白衣の男 急に期限が早まったのです。そういうことはあるものです。

男 私たちはいったい……。
白衣の男 ですから、あなたがここにいるのはおかしいのです。

男 ……
白衣の男 今、「穴」が掘られています。この後もいくつか掘られる予定になっています。ここにいれば、いつかはそこに入ることになるでしょう。

白衣の男去る。男、箱を開ける。箱から光が漏れだす。今度は本当に美しい。音楽も流れ出す。

男

まやかしじゃない。とても美しい。

獣たちの声が聞こえる。

三 西へは

何事か。工事。巨大なタービンが轟然と廻る。いかにも西部の荒くれといった感じの男に明かりが当たる。荒くれ男は飲んでる。

荒くれ男

あああ、なんてえ日だ。今日は。いやあ、今日だけじゃねえ。

考えてみりゃあ、いつでもなんてえ日だ。素晴らしい、とか気持ちがいい、とか叫んでみてえぜ。緑なす草原、どこまでも澄み切った空、この前の月曜日の舞い散る粉雪、もう少しすれば春を告げるさわやかな風が吹く。だが、そのどいつもこいつも今じゃ、ちくちくしてたまらねえ、ときた。くそう、俺の残りどれだけかわからねえエネルギーを少しづつ食い尽くそうってのか。(酒を飲んでる) ちーとばかり廻ってきやがった。ははは。

少女に明かりが当たる。

少女

ひとりぼっちになったことじたいは、きつと何でもないと思うの。どうしてかっていえば、かなり長い時間、そういう身の上だから、慣れて来ているんだと思うわ。でも、月が見たいの。「ああ、月だけは」って母親が言ったあの月。

荒くれ男

(もう酔って) おおお、ちくちくしねえ、とうとうちくちくしなくなってきたやがった。なんて素晴らしいんだ。なんて気持ちよくて爽やかなんだ。素敵に自由だ。

少女

あの人、素敵に自由なんですって。月の場所を知っているかしら。

荒くれ男

yeahー。自由だ。俺は、今、自由だ。自由を忘れねえようにしねえと。

男、忘れないようにしようとかあがく。

少女

西部の男たちは荒くれただけど気が優しいって聞いたわ。ゴー ウエ スト どこまでも西へ西へ行くんだって。西の月はどんなかしら。

荒くれ男

月だって。そういやあ、満天の星だが、月が出てねえ。おい、俺を見ろ。俺は自由か、気持ちが良いさそうか。

少女

気持ちは良さそうに見えるわ。

荒くれ男

そうか。それならいい。

酒場の女1、登場。

酒場の女1

もつと気持ちよくなったら。

荒くれ男

おまえはだれだ。

酒場の女1

お店の女じゃない。「スーザン」です。

荒くれ男

嘘つけ。

酒場の女1

そう、嘘の名前。

二人笑う。

荒くれ男 さあ、飲もうじゃないか。

少女 もう、飲むのはやめたら。それにその人と話すのはやめた方がいいわ。

荒くれ男 驚くようなことをいうなあ。それはどうしてだ。

少女 それは、あなたに感じるものを、その人からはまったく感じないからなの。

酒場の女1 感じる。

荒くれ男 何を感じるっていうんだ。

少女 うまくいえないわ。

荒くれ男 俺は、酒を飲むことにするよ。

少女は泣きながら去る。

酒場の女1 なんてお子様なんでしょう。あの子。

荒くれ男 マスター。

マスターと他の女の子登場。バンドの演奏が始まり、女の子たちが歌う。

つまらないことや 楽しくないこと 忘れるってどういうこと

考えないこと

そのためにドリンク そのために素敵なお店 私たち

荒くれ男 全員に酒だ。金ならある。

マスター ご機嫌だぜ。今週の特別手当はいかしてたようだな。

荒くれ男 ああ、ぼちぼちさ。臨時収入もな。

マスター おっと、上手い話は後で頼むぜ。

荒くれ男 わかっているさ。お前の取り分はちゃんと預かってる。

マスター もういっぱい、俺のおごりだ。

危ないことや びびっちゃうこと 忘れるってどういうこと

考えないこと

そのためのドリンク そのための特別手当 私たち

奥でつまらなそうな顔をして座っている男にマスターが近づき、

マスター さあ、あんたもやりなよ。強い酒がいいんだろ。ほら。

若い男 強い酒はあんまり。

酒場の女1 坊やにはきついんじゃない。

酒場の女2 甘いカクテルでもどう？ 結構酔うわよ。

酒場の女3 食べるものがないんじゃない。そうだ、今日はラーメンが入っ

たのよ。海苔とシナチクとゆで卵なら用意出来るわ。

若い男 ラーメンはあまり好きじゃないよ。

荒くれ男 おい、おまえら。俺のさわやかで晴れ渡る気持ちを逆なでするような話はやめな。

酒場の女1 でも、ぴったりだわ。この子にラーメンって。

マスター 坊や。この辺りで働いている奴は、みんなこいつをやるんだ。さあ、ぐっと。

若い男 強い酒を飲み干す。

マスター さあ、もう一杯やろう。(荒くれ男に) なあ、お前さん、今度は何を狙う？

荒くれ男 そういふ話は後で、といったのはおまえだぜ。

マスター たしかにそうだが、なに、構いやしねえさ。お宝を目の前にして何もしねえのは男じゃねえ。

荒くれ男 そうだ。俺たちは自由だからな。

酒場の女1 ねえ、あんたただの「運搬屋」じゃないんだろう。

マスター お前は黙ってる。

荒くれ男 なんてそんなことを言う。

酒場の女1 もっとなんかすごいことをしているんじゃないかい。

荒くれ男 だったらなんだ。

酒場の女1 もっといかれちまうわ。

荒くれ男 そうだ。俺たちじゃあ、本当はひどい悪党さ。

若い男が立ち上がった。側についていた女が驚く。

酒場の女3 どうしたっていうんだい、あんた。

若い男 悪党、許すまじ。

若い男の目は爛々と輝いている。酔った。

酒場の女3 この子、いかれちまったわ。

若い男 おまえらが噂に聞いた「ギャング団」だな。そしてこの店がその巣窟か。

マスター なにをおっしゃいますやら。私は店のマスターで、この子たちは従業員。この人は、ほら「運搬屋」ですぜ。みんなが嫌がるものを運んでお足を頂いているんですさあ。特別手当なんて役得も、危険から考えりゃあ、大したもんじゃねえ。

若い男 そればっかじゃねえだろ。その運搬の最中になにをやらかしているやら。

マスター とんだ坊やがいたもんだぜ。食い詰めて「向うの街」から流れて来たんだろうがな。

酒場の女2 知ってるっていうの。それじゃあ仕方がないわねえ。

酒場の女3 あんた、誰なの？

酒場の女2 昼間はこの人たちと一緒に「運搬屋」。許可証があるのをいいことに、こっちで積込みやあ金になるものをちよい、あっちで電柱

を回収すりゃあ電線をちよい。泥の中から携帯電話が現れりやめつ
けもの。レアメタル様のご登場。

荒くれ男・マスター まさかおまえ。俺たちの悪い仲間のおまえだった
のか。知らなかった。

酒場の女2 夜は趣味に走っていました。

酒場の女3 あんた、まさか。

酒場の女2 そう、私は男。

と、股間からマグナムを取り出す。酒場の女たち、悲鳴。

マスター 股間からマグナム。

酒場の女2 (若い男に) さあ、生かしちゃおけねえ。

荒くれ男 よせ。(とマグナムを奪い取る。若い男に)「片付け屋」だろ。

「穴」の近くで顔を見たことがある。「片付け屋」は楽しいか。

若い男 なんだって?! 楽しいはずがない。

荒くれ男 じゃあ、俺たちのこともわかるなあ。おまえは、なんでもかん

でも「穴」に放り込むだけ放り込む。そりゃ仕方がねえ。仕事だか
らな。酒も飲みたくなるだろう。だが、俺たちは、違う。人が捨て
ていったものを運び出して、きれいにしただ。どこで使われるか
俺たちは知らねえ。そこにお宝がありゃあ、そいつを少しばかり頂
戴したって、それほどのことはねえ。捨ててあるんだ。

若い男 捨てたかったわけじゃ・・・

荒くれ男 生かしてやってんだって。捨てちまうしかねえ、いろんなもの

をさ。

若い男 でも、

荒くれ男 やりたくてやってんじゃねえ。他にやれることがねえんだ。

若い男 俺もだ。

荒くれ男 じゃ、そういうふうを考えさせるよ。

若い男 でも、あんただって飲んでるじゃないか。

**荒くれ男マグナムを男に向ける。酒場の女3が素早く動き、胸元か
ら小型拳銃を取り出し若い男に渡した。**

酒場の女1 どういうつもり。

酒場の女3 私は、今の間に、すっかりこの子にいかれちゃったのさ。

二人銃を構える。少女が走り込んでくる。

少女 やめて。そんなことをするのはやめて。

荒くれ男 俺はお前と喧嘩するつもりはないんだぜ。

若い男 俺は、もうわからない。

少女 それなら、やめたほうがいいわ。(荒くれ男に) あなたやっぱり西部
の男だったのね。それならあなたもやめたほうがいいわ。気が優し
いはずだもの。

荒くれ男 さっきの嬢ちゃんか。俺は西部の男なんかじゃねえ。

少女 どうして？ そう見えるわ。

荒くれ男 どうしてかって言えば、俺たちは、西へ西へとはいけねんだ。

ここにずっといるだけなのさ。

少女 やっぱり自由で気持ち良かったんじゃないのね。

荒くれ男 ここにいるしかできねえんだ。だから、西で見える月なんて知りもしねえ。

少女 それなら、ここに月が見える場所があるか教えて。ちようどよく顔を出して、こつちを覗き込んでくれるような「ああ。いつも月だけは」っていいくなるような月よ。

マスター 嬢ちゃん。ここじゃあ、そんなものはねえよ。あっちで、立入禁止区域で電線が根こそぎやられちまってからはさ、その分、こつちに電線を張り巡らしたんだ。必要なだってよ、どこかにはな。だから隙間なんてありやしないよ。

少女 さっきは満天の星だって、この人が言ったわ。

マスター きっと酔っぱらってたのさ。

少女 ……

マスター さあ、どうするね。にらみ合えばなしじゃ、埒があかないよ。じゃあ、こうしよう。数を数えるから、3で銃を下ろすなり撃つなりしなよ。

少女 やめて。

マスター 1、2、

荒くれ男 (銃を下ろし) やっぱりよしておこう。

酒場の女3、若い男の手から銃をとり撃とうとする。

荒くれ男 やめとけ。

酒場の女1が荒くれ男の前に飛び出しかばう。酒場の女3が撃つ。酒場の女1倒れる。銃声。酒場の女3が倒れる。マスターが撃つのだ。

荒くれ男 なんてだ。

マスター こいつは、あんたが2で下ろした瞬間に撃とうとしたんだ。

荒くれ男 (酒場の女1を見て) 死んだ。可哀想に。こいつ、なんて言う名前だったっけ。

マスター さあ。なんで死んだんだろう。

酒場の女2 案外、本気だったのかも。

若い男 (酒場の女3) こつちも死んでる。こんなところにいたからだ。馬鹿みたいだ。

荒くれ男 誰が？

若い男 ……

少女 なんだかとても哀しいわ。

荒くれ男 (少女に) 嬢ちゃんは、とにかくここを出な。

少女が去り、明かりが暗くなっていく。

四 センターで

森の外れ。センターがある。「CENTER」の看板。白衣の女、検査官がいる。若い男がやってくる。白衣の女は酒場の女3に似ているかもしれない。

若い男 来ました。

検査官 え？

若い男 いや、だから机のメモ。

検査官 ああ。そうだったわね。

隣室で電子音。検査官、隣の部屋に行く。しばらくして戻ってくる。

検査官 あの測定器も駄目ね。

若い男 また故障ですか。

検査官 だと思う。動いてるけど。

若い男 新しいの、送ってもらおうんじゃないんですか。

検査官 申請は出してるけどね。どうでもいいってことじゃない。まだ届かないのよ。

若い男 え。ああ、測定器。

検査官 はあ？

若い男 はあって・・・

検査官 それで来たんじゃないの。メモ。

若い男 ああ。検査の結果ですか。

検査官 あなたの。

若い男 本部から。

検査官 そう。

若い男 なんだか最近、なんでも遅いですね。

検査官 え。

若い男 ほら、かわりの人、来る予定じゃないんですか。

検査官 ああ。なんか赴任拒否とかじゃない。

若い男 え。ああ、そういうのあるんですか。やっぱり。

検査官 あなた、仕事は。

若い男 今日はもう。

検査官 ・・・・じゃあ、いいわね。・・・。最近、数も減ったから暇なんですよ。

若い男 ・・・・前よりは。

検査官 ご飯食べた。

若い男 ええ。

検査官 なんかもまだ残ってた？

若い男 いつもですけど。レトルトとか。

検査官 人間らしいものが食べたいわね。代り映えしないし。送られてくる

食糧。

若い男　なんですか、たとえば。

検査官　え。

若い男　その、人間らしい食べ物って。

検査官　さあ。

動物の音がする。

若い男　「穴」の近くで見ましたよ。猪。

検査官　猪ね。今の時期は食べ頃よ。今なら風で落ちたリンゴや桃を食べてるけど、冬になると雪を掘り返して、木の根や虫を食べるからだいぶ上がっちゃうわ。

若い男　食べる話ですか。

検査官　そう。

若い男　食べるんですか。

検査官　いえ。禁止されているから。生態系を壊すな、って理由だけ。こ

若い男　熊いますね。

検査官　こうなってるから、山脈越えて入って来たっていうけど。

若い男　人が、いないからってことですか。

また動物の音がする。

検査官　いるけどね。人。もうほとんどいなくなって来たけど。みんな死んだから。でもいいんじゃないの。

若い男　なにがいいんですか。

検査官　ロシア語で、ええ、サマシヨールだっけかな。その戻って来ちゃったり居残っちゃたりする人。

若い男　どういう意味ですか。

検査官　わがままな人。

若い男　いいのかもしれないですね。

検査官　なんじゃそりゃ。だから、あなたの仕事もあるんだけどね。

若い男　・・・ここで何してるんだらう。

しばひくの間。

検査官　さっきのは鹿よ。

若い男　え。ああ、鹿が鳴くんた。

検査官　なんだって泣くわよ。

若い男　え。

検査官、動物の鳴き真似をする。最後は人間が彼女自身が泣く。

検査官　ねえ。セックスする？

若い男　・・・

検査官 あれ？ あ、食い気の次は色気と思ったんですよ。

若い男 思っていないですけど・・・

検査官 じゃあ、化粧してると全然違うなって思ったんですよ。スッピン思
い出すとつれえな、とか。

若い男 思っていないです。

検査官 じゃ、なに。

若い男 え。

また測定器の電子音が隣室から聞こえてくる。検査官は動かない。

若い男 いいんですか。

検査官 ・・・・

若い男 あの。

音が止まる。

検査官 なんでこっちの部屋にいるかわかる。

若い男 いや。

検査官 あたしね、想像力が豊かな理系なのね。あのおんぼろ器械の前に立
つてね、中でネズミのミンチがぐるぐる廻ってるのを想像するのが
嫌なの。それだけ。

検査官行く。男、一人残される。かなりの時間たって検査官が戻っ
てくる。

検査官 あんた、ラーメン食べたことある？

若い男 なんですか。

検査官 お腹が減って来たんじゃない？

若い男 え。

検査官 毎日毎日ネズミ取りからネズミを取り出してミンチにしていよう
が、「穴」の中になんでもかんでも放り込んでいく仕事の男がいろ
うが、お腹は減るし、セックスもしたくなるってことね。

若い男 食べたこと、ありますよ。

検査官 なんで男ってラーメンが好きなの？

若い男 僕は、

検査官 あんたのことじゃなくて。「食べたことないんだ、お嬢だなあ。じゃ
あ美味しい店へ連れて行ってあげるよ」 わからないですよ。

若い男 ええ。

検査官 食べたことがなかったの。母親がいうの。絶対駄目だって。

若い男 ・・・・身体にあんまり良くないから？

検査官 そうね。そうだった。だから、男の人と付き合ってるといつも母
親を裏切るような気持ちになるの。ラーメン食べるたびに。馬鹿み
たいでしょ。

若い男 いや・・・

検査官 自分でそう思うの。あの時、食べ物がなくなったじゃない。コンビ

二とかスーパーとかあつというまに棚が空になって。

若い男 ええ。そう聞いてます。

検査官 ほんの何日かで、何もなかったみたいに元通りになったけど。「向うの街」じゃね。

若い男 僕の家にはいつも買い置きがありましたよ。用意しておくといいものって紙が冷蔵庫に張ってありました。

検査官

ね。そうでしょ。普通はそうなの。いつだって、どこで何が起きるかわからないんだし。でもね、うちはしなかったのあの後だって。新鮮なものがいいんだって。おかしくなっちゃうでしょ。どっちが身体にいいんだか悪いんだかわからないし。

若い男 どうしたんですか。なんか今日は・・・

検査官

いいからもう少し聞いて。一度だけの例外の話。あの時、二つだけ買えたのよ。母親が買って来た。それにお湯を注いで3分待った。子どもだった私は、とてもお腹がすいていた。でも、母親がなんていうのか、どうなるのか、そればかり気になっちゃって。で、3分経ったの。

若い男 それで・・・。

検査官 そりゃ、食べたわ。二人で。

若い男 ・ ・ ・ それで、どうだったんですか。お母さんは。

検査官 さあ。

若い男 さあつて。

検査官 何も言わなかったと思うわ。顔は覚えている。

若い男 ・ ・ ・ どんな顔でしたか。

検査官 それがわからないの。私には。

若い男 どういうこと？

検査官 子どもが出来たみたい。

若い男 ・ ・ ・

検査官 あなたの子じゃないとしたら、熊かイノシシか鹿の子どもね。

若い男 ・ ・ ・

検査官 どうする？

若い男 うん・・・。

検査官 馬鹿ね。

若い男 え。

検査官 あなたは、まっとうすぎるわ。純粹なの。何か自分に出来ないかと思っただでしょう。しょせん規則違反だしね。

若い男 規則・・・

検査官 ここでは、そういうことしちやいけなし、もちろん産むなんて駄目。

若い男 どうして。

検査官 危険だからでしょ。それから責任が取れないとか。あなた、書類に

若い男 サインしなかった？

若い男 いや、知らない。

検査官 下請だからかな。いいと思うんだけどね。

若い男 なにが。
検査官 データを取るには。

若い男 産もう。

検査官 え。

若い男 産んで、逃げればいい。

検査官 なにいつてるの。

若い男 外国でもいいじゃない。

検査官 馬鹿みたい。

若い男 じゃあ、どこかにこっそり隠れて、

検査官 それが困るの。

若い男 ……

検査官 だいたい、それで解決するの。

若い男 え。

検査官 わかったわ。あんたの子どもじゃない。

若い男 だって、

検査官 熊かイノシシか鹿の子どものな。

隣室の測定器が、これまでと違った音を立てる。

検査官 行かなくちゃ。データを記録して、新しいネズミを用意して、それから……。やるのがたくさんあるわ。

若い男 僕は……

検査官 はい。(懐から紙片を取り出す) もう届いていたんだけど。少し話しましたかったから。あなたの検査の結果。

男、渡された紙を見る。

検査官 おめでとうございます。合格。なんにも問題ないわ。あなたは、ここで働き続けることもできるし、それから、やめて、それこそ外国へ行くこともできるわ。素敵ね。

若い男 僕は馬鹿みたいだ。

検査官 私は、少なくともここでやることがあるわ。

若い男 あなたは、それでいいの。

検査官 聞いたのよ。

若い男 え。

検査官 ラーメン屋があるの。

若い男 ラーメン屋？

検査官 この森の中に。そこはねえ、気難しそうな親父さんがいる、あまり綺麗じゃない店だわ。そこに行くとか食べられるのよ。あの時のラーメンが。そこにはきつというんなラーメンがあるわ。でも味の決め手は金色の箱。

若い男 箱？

検査官 そう。秘密の箱ね。

若い男 ……

検査官

それで、母親と二人、幼い私がそこにいて、3分待つわ。ラーメン屋で3分待つなんておかしいけれど、そういうラーメン屋さんだわ、そこは。それで、母親の顔をじっと見るの。待っている間、食べている間、それから食べ終わった後も。それでわかるのよ、私にも。ああ母は私をこんなふうに思っていてくれてたんだって。あんなに身体に悪いから食べちゃいけないって言ったものを食べさせなければならなかったあの人の、そう、決してもう私にはわかることのない母親の気持ちだ。

若い男

誰から聞いたんですか、その話。

検査官

森のラーメン屋。

若い男

・・・

検査官

想像力が豊かだから。

若い男

だから、意味があればって思うわ。家を離れて、私がここに居続けることにね。もちろん、きっといつかは忘れられていく。ネズミをたくさん殺した女のこと、ネズミをたくさん殺す仕事を作った人たちのことも。不思議ね、ここにはゴキブリはいないのよ。ゴキブリは弱くてネズミは強いみたいなの。データからわかるのよ。人間はどうかしらね。2万4千年後のことなんて誰にもわかるわけがないけれど、関係もないけれど、だからこそ・・・。さようなら。

検査官、隣室へ行く。若い男一人残される。

五 失われたものと

探している。ない。戻って来た男に明かりが当たる。

戻って来た男 なにかあったわけじゃないんだ。強いて言えば、親父が死んだとかそういうことだけど。なんだか、俺……。周りの連中にもむかついてたし。「向うの街」において、なんか馴染めないんだ。それが当たり前だと想っていて、そんなこと長い間思ったこともなかったのに、突然。子どもの頃いたここへ、とにかく一度戻らなきゃって思った。それまでそんなことほんと考えもしなかったんだ。でも、やっぱり……。だけどその後、奇妙な話しだけど、彼女に言ったんだ。「あそこへ行きたい。いや、戻りたい」って。「どうして」っていわれたから「故郷だから」って、「どうぞ」って行って、多分気に入らなかつたんだろう。

男、探している。

戻って来た男 ない、ない、どこにもない……。あ。

男、「穴」に落ちる。

戻って来た男 あ、痛え……。ここは……。(上を見上げる)

少女が持っていた人形がいる。

戻って来た男 これ……。

「あの子」が現れ、人形を抱きしめる。

戻って来た男 君は……。

少女、現れる。

少女 良かったわ。ずっと考えていたの、信じられなくらいたくさん。もし、そのお人形があなたの所へたどり着いていなかったらって。(男に気がつき) あら、あなた。

戻って来た男 や、やあ。

少女 このあいだはありがとう。見て。無事にあの子に返すことができたわ。二人は一緒よ。あなたのおかげね。

戻って来た男 ああ、よかった。

少女 (あの子と人形に) 本当に良かった……。あら、どうしてでしょう。

少女の目から涙があふれる。

戻って来た男 大丈夫かい。

少女 あの子がお人形と一緒にになって、すっかり心配事は消えたはずなのに。身体の奥に涙の固まりがあって、どんどん溢れてくるみたい。どうしてでしょう。考えてみなくちゃ。

あの子と人形がじっと立っている。

戻って来た男 あの子は、口が聞けないのかい。

少女 ええ、もう。具合が悪くなっちゃったの。

戻って来た男 そうか。きっとそういうことは哀しいことなんだよ。

少女 ほんとうにそうね。だから私、一緒にあるべきものをそこに返しに来たはずなのに。それでもまだ哀しいんだわ。

あの子と人形消える。

少女 さようなら。(と泣いている)

戻って来た男 さあ、もう泣かないで。

少女 どうして。

戻って来た男 どうしてって・・・

少女 だって、まだ涙のもとがあるんですもの。

戻って来た男 そんなこと考えもしなかったな。

少女 あなたどこから来たの。ここは私の「穴」だとばかり思っていたけど。

戻って来た男 君の？

少女 そうよ。

戻って来た男 そんなに泣いてちゃ、話しも出来ないよ。

少女 泣いていても、話しは出来ると思うけど、そういうのなら。

少女、泣き止もうとしてみる。

戻って来た男 月が見える場所は見つかったのかい。

少女 まだよ。残念なことに。あら、そうだわ。あなたの探し物は見つかったの。

戻って来た男 いや。たしかに前に来た時はあったのに。片付けられてしまったのかもしれない。

少女 そうね。「片付け屋」さんたちの、大きな車がたくさん来ていたことがあったから。

戻って来た男 そうなのか。じゃあ(と穴の中を見渡す)

少女 言ったでしょ。ここは私の「穴」だから。

戻って来た男 戻って来たのに。

荒くれ男、馬に乗って登場。子供用玩具の木馬に見えなくもない。

少女 あら、あなた。

荒くれ男 yeah!

少女 この前に比べて、ずいぶん晴れ晴れとしたお顔だわ。どうしたの。

荒くれ男 俺は悪党なんだぜ。お宝がある所どこでも現れるのさ。それより嬢ちゃん、まだこんなところにいたのかい。月は見つかったのかい。

少女 まだよ、残念なことに。

戻って来た男 おまえ、まさか。

荒くれ男 しよう。また会えるとは思わなかったぜ。 yeah!

少女 お知り合いなの！

戻って来た男 子どもの頃からの友達なんだ。

少女 まあ。じゃああなたもここにいたのね。

戻って来た男 おまえ。

荒くれ男 なんだい、竹馬の友よ。 yeah!

戻って来た男 変ったなあ。

荒くれ男 人はいつだって変わるもんさ。どっちにもな。

荒くれ男、馬を下りる。

荒くれ男 手紙を読んでくれたってわけだ。 yeah!

戻って来た男 ああ。読んだよ。

荒くれ男 ずっと手つかずだったこの辺りも、そろそろ埃が舞わないようになってな、片付屋が動き出すってネタを仕入れたのよ。 yeah!

戻って来た男 感謝してるよ。だけど、

荒くれ男 ああ、間に合わなかったようだな。あの家も残されたものも、

どこかの「穴」に消えちまったってわけだ。余計なおせっかいだったかい。

戻って来た男 いや。

少女 お仲間はどうしたの。

荒くれ男 穴の前で、俺が様子をうかがって戻ってくるのを待っているはずよ。 yeah! 可愛いが、馬鹿な奴らだぜ。 yeah! yeah!

戻って来た男 なにかそういう風に喋る決まりでもあるのか。

少女 そうだ。あなたもやってみたらいいわ。

戻って来た男 なに言ってんだ。

少女 ねえ、そうしてみたらどうかしら。

戻って来た男 ……。よく俺に便りをくれたなあ。 yeah!

少女 西部の男が増えたわ。

荒くれ男 FBを見たからな。

戻って来た男 FB

荒くれ男 フェイスブック。

荒くれ男・戻って来た男 yeah!

戻って来た男 おまえがフェイスブックか、 yeah! 似合わないぜ。

荒くれ男 言ったろう。情報だって知ってなきゃ yeah!という商売は出来やしねえさ。今どきフェイスブックをやっていないカウボーイがいるものか。

戻って来た男 「出身地」で検索したんだな。

荒くれ男 よく戻って来たな。
戻って来た男 おまえこそ、ずっとここか。

荒くれ男 なに、西は俺にあわねえだけさ。 yeah! おまえがなんだかい
らついていることはわかったぜ。

戻って来た男 なにかひっかかちまうんだ、何をやってもさ。 楽しめるもんが
何にもねえんだ。 yeah!

荒くれ男 yeah! 女房はごうした。

戻って来た男 yeah! やよならや。

荒くれ男 馬鹿だな。

戻って来た男 馬鹿なんだ。

荒くれ男 おまえの人生だけだな。 だが楽しんでる奴はいるぜ。

戻って来た男 あれから後もか。 能天気なんじゃねえか。 そういうやつは。

荒くれ男 どうだかな。 頭がいいんじゃないのか。

戻って来た男 この世に急に産まれたみたいないな気になっちまったんだ。 おかし
いだろ、急に産まれるって。 なにかあるじゃないか。 普通は。 親が
子どもの頃のなにかとか、うまくいえねえけど・・・。 覚えている
かい、ガキの頃、学校からの帰り道に道草食っていると、怒る大人が
いるのさ。

荒くれ男 歩いていて会う奴は、知ってる顔ばかりだったな。

戻って来た男 自分の場所だった。

少女 そうなの。

荒くれ男 時は過ぎていくぜ。 みんなどこかへ行っちゃうんだ。 だがそう
すると失われたものが見えてくるってことはあるかもしれねえ。

戻って来た男 そうだ、その通りだぜ。

少女 私見てみたいわ。 その場所を。

荒くれ男 じゃあ、こいつの家に行ってみるか。

少女 ええ?!

荒くれ男 yeah!

三人、馬に乗り、戻って来た男の家に向かう。

荒くれ男 学校からの一本道を下っていくと、最初にあるのがこいつの家
だ。 たまり場だったな。

戻って来た男 迷惑な話だぜ。

荒くれ男 ガラガラと玄関を開けると、ジュウシマツの鳥かごが左手にあ
った。

戻って来た男 よく覚えているな、確かにあったぜ。

荒くれ男 廊下の左手には仏壇がある部屋があって、写真が額に入れてあ
った。

戻って来た男 そうだ、写真。

荒くれ男 右側が、

戻って来た男 婆さんの部屋だ。

荒くれ男 なんか怖かったぜ。 急に怒るんだ。

少女 どうして？

荒くれ男・戻って来た男

しーっ。

三人、さらに家の奥に向かう。

戻って来た男 そこを静かに通り過ぎると、俺の部屋だ。

三人「部屋」に来た。

戻って来た男 ……ここに机があった。

荒くれ男 ベッドはそこだった。

戻って来た男 こっちは本棚だ。

荒くれ男 隣がテレビのある部屋だったぜ。

戻って来た男 ああ、壁が薄くてよ。

二人笑う。

少女 いったいどうしたの。

荒くれ男 テレビだけじゃねえ。屁の音まで聞こえるのさ。

戻って来た男 親父のだけぜ。

荒くれ男 俺たちの笑い声も聞こえてたんだろうなあ。

戻って来た男 後で何か言われるかと思ったら、何にもなかったような顔して

たけどなあ。

また、笑う。

戻って来た男 夜勤があったからな。昼間も家によくいたんだ。

荒くれ男 郵便局だったな。

戻って来た男 ああ。

荒くれ男 出前をとってくれたな。

戻って来た男 親父がか。

荒くれ男 ああ。

戻って来た男 覚えてねえな。

荒くれ男 いや、たしかにそうだ。あれは、

荒くれ男・戻って来た男 金のスープのラーメン。

少女 金のスープ。私、ラーメンで頂いたことがないわ。

荒くれ男・戻って来た男 美味いんだぜ。yeah!

荒くれ男 親父さんはどうした。

戻って来た男 最後まで「向うの街」で知らない顔に「お知らせ」を配達し続

けてたぜ。もうラーメンも食えなくなっちゃった。

荒くれ男、馬に乗ろうとする。

戻って来た男 おまえ。

荒くれ男 さあ、行くぜ。ここでの仕事は終わったようだ。

少女 どこへ行くの。

荒くれ男 嬢ちゃんよ。俺は心を入れ替えたんだぜ。

少女 どういうことなのかしら。

荒くれ男 きっかけは、あの夜の馬鹿な女さ。俺のために死んだ馬鹿な女さ。女が一人、おれのせいさ。俺は決めたのさ。いい「運搬屋」になるってな。いまだに残っていたり、忘れられちゃったもんをさ、掘り起こしちゃ、それをできるだけでもうここにいない連中に届けてやるんだ。嫌な顔をする奴もいるし、危険じゃないかっていう奴もいるし、忘れちゃみたいってやつもいるし、いろいろだがな。

少女 ……。

荒くれ男 もう一つのきっかけは、おまえさ。

戻って来た男 俺が。

荒くれ男 FB ったのも悪くねえぜ。お前の名前を見つけた時は嬉しかったぜ。

たぜ。 yeah!

戻って来た男 俺の名前……。

荒くれ男 ああ、竹馬の友よ。お前の名前だ。「友達申請」受けてくれて良かったぜ。

戻って来た男、名前を思い出したか。

少女 二人とも晴れ晴れとしたお顔だわ……。

戻って来た男 時間はかかったが、おまえのおかげだぜ。

荒くれ男 少しは役に立ったのなら、嬉しいぜ。

戻って来た男 俺はもう少しいる。

荒くれ男 そうかい。

戻って来た男 それで、泣いてみるさ。この子のように。まずはな。そういう時間がなさ過ぎたんだ。

戻って来た男「部屋」にしゃがみ込む。

少女 あなたが泣くのは、もう一緒にあるべきものが戻って来ないからのね。それはとても哀しいことだわ。あの子にはお人形がいて、私には……。月はどこかしら。

荒くれ男 悪くねえかもしれねえぜ。

少女 え。

荒くれ男 探し物があるってことはよ。だが、そいつは、俺にはどうしてやることもできねえ。いい「運搬屋」にも運べねえものがあるさ。さあ、行くか。仲間が待ってるからな。俺のエネルギーは満タンだぜ。

戻って来た男 (少女に) いつのまにか君の「穴」が、俺の「穴」になっちゃった。

少女 いいのよ。

荒くれ男 さあ、行きな。

少女 あなたは。

荒くれ男 俺も行くさ。これから枯れ果てるまで涙を流す「友達」の横にしばらく居てからな。月が見つけれられるように祈ってるぜ。

荒くれ男戻って来た男のもとにしゃがみ込む。少女月を探しに。
残った男たちに、一瞬明かりがさし、月明かりのようにも見える。

六月を照らす

森の中。「穴」を目の前にして男が二人しゃがんでいる。一人はマスターに似ているし、もう一人は酒場の女2に似ている。とりあえず男1と2。待っている男か。

男2 俺たち、こんなところで何してるんだ？

男1 . . .

男2 なあ、俺たち、こんなところで何してるんだ？

男1 . . .

男2 なあ、

男1 待ってるんじゃないか。

男2 . . .

少し黙るが、

男2 でも、俺たち、

男1 少しの間でも黙ってられねえのか。さっき、怒鳴ってからまだ1分も経ってねえじゃねえか。

男2 わかったよ。でも俺たち、こんなところで何してるんだ？

男1 わかった。落ち着けよ。もう一度言うぜ。俺たちは、あいつに言われてここまで来た。この「穴」の前までな。で、様子を見てくるから「待ってろ」と言われて、ここで待ってる。これが肝心だ。「待ってろ」

男2 わかったよ、それは。俺たち「仲間」だから一緒に待ってるんだ。

男1 ああ。楽しめよ。森は緑だし . . .

男2 それから？

男1 さっき聞こえたのは、きつと熊のうなり声だしな。

男2 . . . なんでこんなことになっちまったんだろう。

男1 熊が。

男2 違うよ . . . 俺、わかったよ。

男1 なにがだ。

男2 みんなさ、近づこうとしない訳だよ。

男1 禁止されてるからだろ。

男2 そうだけど。

男1 じゃあ、それでいいな。

男2 それだけじゃなくて、

男1 やめろよ。面倒くさいことを言い出すのは。

男2 でも、

男1 じゃあ家に帰れよ。

男2 帰っていいのか。

男1 ああ？
男2 でも駄目だ。なあ、家ってのはさあ、落ち着くものだろ。
男1 そうかもしれないねえな。
男2 自分の家ってのは一番落ち着けるはずなのに、なんか怖くなるんだ。
男1 ここに来る前の話だよ。
男2 で、ここに来てどうなんだ。
男1 (泣きそうになり) もっとひどいんだ。ちくちくする。
男2 ああ、泣くなよ。
男1 だから、みんな近づかないんだって思ったんだよ。
男2 はじめやがった。やめろって言っただろ。
男1 仕方がないじゃないか。
男2 なんて俺に話すんだ。
男1 隣にいるから。
男2 馬鹿なこと聞いちゃまった。
男1 じゃあ、誰に話すんだい？
男2 俺以外の誰かだよ。
男1 (辺りを見回してから) いないんだ。
男2 俺、かなり気持ちが悪く落ち込んだぜ。
男1 落ち込まないようにしないと。
男2 うるさいよ。言われたくないよ、おまえに。
男1 (なにか取り出して) ほら。
男2 なんだよ、今度は。
男1 これ。わかるだろ。
男2 わからねえよ。
男1 さっき拾ったんだ。
男2 なんだよ。
男1 月球儀だよ。月なんだ。
男2 そんなものどうしようっていうんだ。
男1 夢を持ったことがあるかい？
男2 面倒くせえ話じゃないだろうな。
男1 絶対手に入らないかもしれないけど、いつも空想してみる夢。
男2 多分な、あるよ。
男1 へえ。
男2 今は覚えてねえぞ。
男1 ここのところを見て。(月球儀の一方所を指し)
男2 ああ、見たぜ。
男1 ここに住んでみようと思うんだ。
男2 なにいつてんだ。
男1 こっち側でもいいと思うんだけど、裏側だろ。裏側からは地球は見えないっていうし。こっち側なら・・・
男2 勘弁してくれ。
男1 すごいだろ。
男2 わかった。おまえはおかしな野郎だと思っていたが、神経が疲れて

るんだな。考え過ぎなんだよ。考える暇がないぐらいがちょうどいいんだ。いいから、待ってようぜ。

二人、待とうとする。

男1 わかった。こうしてると考えちまいそうになるってことはな。わかってくれたんだね。

男2 だけど、おまえはわかってない。

男1 え。

男2 月には住めねえんだ。おまえも、俺も。

男1 ．．．

男2 ．．．

男1 ．．．
そりゃ、いつかはどうにかなるかもしれねえ。だけど、その間に、きっと俺たちは月まで歩いていつて帰って来られるぜ。生きていりゃあな。だから、ここにいる。

男2 そのことを考えると完全に落ち込むんだ。

男1 落ち込まねえようにしねえとな。

男2 ．．．ありがとう。だけど、

男1 損したのか、俺。慰めて。

男2 また、あんなことが起きたらどうしよう。

男1 ．．．

男2 また、どこかで．．．起きるかもしれないだろ。

男1 起きちまうかもしれねえな。また、どこかで。

男2 平気なのか。

男1 平気じゃねえさ。

男2 ．．．

男1 泣くな。

男2 でも、

男1 喋るな。

男2 ．．．

男1 よし、わかった。とっておきをおまえだけに教えてやる。俺が、いざつてとぎのために考えてることや準備していることをな。

男2 うん、うんうん。

男1 まず、そういうときには落ち着かなきゃいけないのさ。そこからすべてが始まるんだ。

男2 ああ、わかるよ。

男1 「緊急時にはリラックスしろ」わかるか？

男2 うん。どうやって。

男1 落ち着けよ。いいか。煙草とコーヒーさ。特に俺の中で缶コーヒーはすげえウエイトを占めてる。普段は箱買いしてるんだが、そういうとき飲みたいのはきつとホットなんだよな。ホットならジョージ

男2 アオリジナルしかねえだろ。だから、俺、自動販売機の場所をいつだってチェックしてるんだぜ。小銭の用意もな。すげえな。

男1 だろ。

男2 あの、夏場には、ホットコーヒー売ってないんじゃないかな。

男1 それが、弱点なんだ。

男2 煙草もらっていいかな。

男1 切れてるんだ。

男2 缶コーヒーは。

男1 ここにはねえよ。

男2 . . .

男1 安心したら、もう少し待ってみようぜ。

二人、待つ。

男1 なあ。

男2 . . .

男1 俺たち、こんなところで何してるんだ？

男2 . . .

男1 なあ、俺たち、こんなところで何してるんだ？

男2 待ってるんじゃないのかい。

男1 なあ。何やってんだ。

男2 . . .

男1 待ってるだけじゃ考え込んでしまうな、また。考えてみたらどうか。想像してみるんだ。

男1 なにを。

男2 生きていて良かったって思った時のことはどうだろう。

男1 そんなことあったのか。

男2 ああ。

男1 いつだよ。

男2 これからさ。

男1 少しわかるぜ。

男2 . . .

男1 泣くなよ。

男2 わかったよ、待ってればいいんだろ。

男1 待ってる . . . だめだ。

男2 え。

男1 よし。知ってるか。月つてのはな、自分で光らねえんだぜ。

男2 え。

男1 照らされて光るんだ。

男2 なにに。

男1 俺が照らしてやる。お前も一緒にだ。

男2 どうすればいいの。

男1 簡単だぜ。ちょっとそれ持って、そこに立てよ。(月球儀のこと)ほ
ら。こんなものがある。(懐中電灯を取り出す)

男2 拾って来たのかい。

男1 違うぜ、必要そうなものだろ。準備してあるんだ、俺は。さあ、も
っと高く。そう、そんな感じだ。

男2、月球儀を持って高く掲げる。

男2 いくぜ。

男1、懐中電灯をつけると、月が輝いた。

七月の向うに出かけよう

若い男と少女が歩いて来て出会う。

少女 あら、あなたは。

若い男 やあ、君は。

少女 どこからいらっしやっただの。

若い男 向うから、センターからだよ。君は。

少女 私はあっちから。「穴」の中からのの。

若い男 不思議だ。もう誰にも出会うことなんかないような気がしていたのに。

少女 私は一人つきりになったような気がしていたの。

若い男 もしかして、君。

少女 もしかすると、あなたも。

若い男 ひどく孤独に感じるんだ。

少女 私も。

若い男 人を好きになろうとしたがうまくいかない。周りからだれもがいなくなったりするんだ。それで、これまで自分を裏切って、できやしないしたくない事までしてきた。

少女 いなくなるってことは、私、わかるわ。私の問題は、どうやら一緒にあるべきものが、私には存在しないってことみたいなの。

若い男 君と僕とは違う。だけれど、問題があるってことは一緒だ。

少女 私、考えてみるわ。

若い男 え。

少女 私よく考えてみるの。信じられないくらいたくさん。

若い男 わかるよ。

少女 本当？

若い男 ああ。僕も考えるんだ。言葉にするのは苦手だけど。

少女 なんだか、今、急にとても気持ちがよくなったわ。

若い男 本当かい。それじゃ、もっと聞かせてくれないか。

少女 あなた、とてもまっとうだわ。

若い男 欠点だと思ってた。

少女 そうじゃないのよ、きっと。他に私たち、どうしようもないんじゃないかしら。

若い男 なんだか僕も気持ちが悪くなったきた。まず何を考えるんだい。

少女 私の問題は、私が金色のラーメンを食べたことがないってことと同列なの。

若い男 ラーメンのことと、それにまつわる時間のことを考えていた人を、僕は知っているよ。

少女 心強いわ。まずはどうすればいいのかしら。そうだ、あなた、なにカヒントを頂戴。

若い男 想像のきっかけだね。こういうのはどう？ 「食べたことないんだ。

少女 お嬢だなあ。じゃあ美味しい店へ連れて行ってあげるよ」
ええ、喜んで。

ラーメン屋が森の中に現れる。店主は、何もかも失くしたあの男。

若い男 すごい。想像の力だ。

少女 どうすればいいの。

若い男 食べて、それからなにか話をするんだ。まず、座ろう。

男 来た。本当にまた。お前が言った通りだった。いらっしやいませ。

若い男 本当だった。

金色の箱をあけ、男、ラーメンを作り始める。

若い男 ああ、金の箱だ。

少女 何を話そうかしら。

若い男 家族の事とか、恋人の事とか、なんかいろいろ。なんでもいいんだ。

それで、後でまた、あの時のラーメンはおいしかったねとか、ま
ず
かったねとか。

少女 私にも出来るのね。そういうこと。

若い男 ああ。そうみたいだ。僕にもまだ。

男 おや。

月や星が現れる。

少女 わかったわ。それでもあの人は月を見つめていた、最後まで。あの
人はわかっていたのね。「月だけは」、いつでも月だけはそこに在る
てこと。

若い男 君が照らしたんだ。輝いてみえる。

少女 あなたもよ。光が射している。

月が二人を照らしている。

少女 あんなに探しても見つからなかったのに。

若い男 何年も生きて来て初めて見たような気がする。あれは、いつでもあ
そこにあるんだ。

少女 私、生きているのね。あと少しかもしれないけれど、私のエネルギー
ーの使い道がきつとあるのね。

若い男 この気持ちがいっつでもわかればなあ。どこでも感じていられたらな
あ。

男 またおいで。

少女 信じられないくらい、たくさん考えれば。

男 とりあえず。

ラーメンが出されて。二人が食べ始める。月明かりが照らしている。

終わり

台本を書くにあたり、実に多くの著作、web上の情報を参考にさせていただき、また、たくさんの方の話しを聞きました。皆様には感謝致します。すべてをあげる事は出来ませんが、特に、引用・参考したものを以下に記します。ジョン・パトリック シャンリイのいくつかの戯曲、特に「ダニーと紺碧の海」「お月さまへようこそ」からインスパイアされた人物、台詞、設定が多くあることを感謝とともに書き記します。

- 暴走する原発 チェルノブイリから福島へ これから起こる本当のこと（広河 隆一）
- チェルノブイリの森―事故後20年の自然誌（メアリー・マイシオ）
- チェルノブイリの真実（広河隆一）
- ドキュメントチェルノブイリ（松岡 信夫）
- チェルノブイリと地球（広河隆一）
- 世界増刊 破局の後を生きる 2012年 01月号
- 震災後（福井 晴敏）
- 遺体―震災、津波の果てに（石井 光太）
- 原発の深い闇 1・2（別冊宝島）
- 明日へ―東日本大震災 命の記録（NHK東日本震災プロジェクト）
- @Fukushima―私たちの望むものは
- 震災ビジネスの闇（宝島 SUGOI文庫） 夏原 武
- フォト・ルポルタージュ 福島 原発震災のまち（岩波ブックレット）豊田 直巳
- 生きている 生きてゆく…ビッグパレットふくしま避難所記
- フクシマ・ゴーストタウン―全町・全村避難で誰もいなくなった放射能汚染地帯（根津 進司）
- 裸のフクシマ 原発30km圏内で暮らす（たくき よしみつ）
- 福島で生きる！（山本 一典）
- 福島に生きる（双葉新書）玄侑 宗久
- 福島原発でいま起きている本当のこと―元・現場技術者がすべてを語った！（浅川 凌）
- ヤクザと原発 福島第一潜入記（鈴木 智彦）
- 美しい村に放射能が降った―飯館村長・決断と覚悟の120日―（ワニブックス PLUS新書） 菅野 典雄
- のこされた動物たち 福島第一原発20キロ圏内の記録（太田康介）
- 被災地の本当の話をしよう―陸前高田市市長が綴るあの日とこれから―（ワニブックス PLUS新書） 戸羽 太
- 原発難民日記―怒りの大地から（岩波ブックレット） 秋山 豊寛
- 放射能から子どもの未来を守る（ディスカヴァー携書）児玉 龍彦 金子 勝
- 災害ユートピア―なぜそのとき特別な共同体が立ち上るのか（亜紀書房翻訳ノンフィクションシリーズ） レベッカソルニット
- 傲慢な援助 ウィリアム・イースタリー
- プルトニウムファイルへ上 下（アイリーン ウェルサム）